自信つけた勉強とフットサルの両立
春からロースクールで弁護士目指す

法学部　平吹彩子さん

春からは中央大学法科大学院で学ぶ平吹さん。「意志の強さ」と「真面目さ」が社会への進路を決めた。幼い頃から弁護士になりたかった。一生仕事を続けていける資格が欲しかった。それと、会社でコンプライアンス（企業の法令遵守）に悩む父親に影響を受け、企業の健全な体制構築に興味を持った。その思いを着実にかなえようとしている。

法科大学院の入学試験の勉強を本格的に始めたのは、3年生になり専門演習を始めてからだ。商法を専門とする豊岳信昭教授の指導の下で、判例研究などに明け暮れた。

豊岳教授は、平吹さんが法科大学院へ進むか、商法の研究員となるかどうかで迷った時、「法曹の資格を取った後、研究員になることもできる」とアドバイスをくれた。法科大学院へ行くと決めてからも、6月の適性試験の前などに弱気になると教授が時間を割いて、研究室で励まし、話を聞いてくれたという。ゼミやクラスの仲間の応援も大きな力となった。

「就職活動は一切せずに、覚悟を決めて、背水の陣で入試に臨みました」という。法曹を目指す強い意志が、バックボーンになった。周りには法曹志望をやめていく人もいた。企業の採用内定を得てリラックスしている友達もいた。自分を振り返り、「焦りもあった」が、「ひたすら1日10時間程度の勉強をこなし続けた」結果、最も自信のなかった中央大学の法科大学院に合格することができた。

「自分でも受かってビックリです」と謙虚だ。2年生の後半に、「勉強だけではいやだ」と思い、女子フットサルチームを自ら立ち上げた。勉強が疎かになるのではないかと、親には反対もされたが、平吹さんは文武両道を成し遂げた。

「勉強と、授業と、フットサルの両立がうまくできたということが、自分にとって大きな自信につながりました」と胸を張る。

「大学の授業を大切にしてほしい」。これが法曹や公認会計士、公務員など資格試験を目指す後輩へ向けての平吹さんのアドバイスだ。「大学の先生の授業は、先生の莫大な知識のなかから選ばれたことが90分に凝縮されたもの。学問の大切な部分だけを取り出してくれている、最も良い教材です」と強調する。

また、法律科目ばかりを重視するのではなく、「美術や哲学、心理学などの教養科目も大切にしてほしい」という。法律だけでは視野が狭くなるからだ。試験に受かるための勉強だけでなく、自分を高めるための勉強も怠らない。この真面目さが、平吹さんを本物と、問題の核心を見抜く目を持った法曹人へと成長させるに違いない。

（石川）

自分を育ててくれた多くの出会い
『好奇心をもち、貪欲でありたい』
法学部　請地世中さん

「広い意味で出会いを大切にしたいと思います」―。4月から航空会社で働くことになっている請地さんは社会人になるにあったっての想いをこう語る。大学時代に出会った多くの人や場所が、自分を育ててくれたと確信しているからだ。

そのひとつは、滝田賢治教授の国際政治経済のゼミで、「最も力を入れた」という。2年生の時に受けた国際政治論の授業で勉強の面白さに気づき、考える力を磨きたいと思って、ゼミに入った。もともと海外、ましてや国際政治に興味があった訳ではなかった。海外に関心を持つようになったのは、2年の夏に中国旅行に行ったのがきっかけだという。

「初めての海外でした。空港に降り立ったとき、自分の知らない世界に足を踏み入れたことにワクワクしました」。そのときの感覚が忘れられず、違うということを素直に面白いと思うようになりました。

異文化への好奇心は広がり、2年生の春休みには、法学部のやる気応援奨学金を利用して、カナダへ短期語学留学した。

「語学学校や航空券、滞在先まですべて自分で考えて手配するという経験は、それだけで勉強になり、自信にもつながりました」と話す。現地ではネイティブの人と話す機会を増やしたくて飛び込みでボランティアもした。図書館や教会、旅行会社などをまわって、ようやく障害者のための寄付金を扱うボランティアに辿り着いた。「ボランティアの内容自体というより、自ら考え積極的に行動したことが自分にとって大きな意味のあることでした」と留学体験を振り返る。

もうひとつ大きな財産となったのが韓国人の友人が出来たことだった。語学学校で仲良くなり、今でもよく連絡をとり続けているという。この出会いが刺激となって、1年前からは韓国語の勉強も始めた。

「大学生活で様々な出会いがあったからこそ、今の自分がある。どんどん外へ出て幅広い人と会うことですね。どんな本よりも実際に人と会い、足を運ぶことで感じることの方が心に届くと思います」と後輩へアドバイス。4月からは、「航空会社で自分の最も伝えたい価値である『出会い』をサポートしていきたい」という。

「総合職として、いろんな仕事を経験しながら広い視野を持っていたい。好奇心を持ち、貪欲でありたい」と請地さんは、社会に出てからも出会いを大切に新たな道を進んでいく。

（吉田）

国際協力は究極のサービス業
JICAでFLPでの体験活かす

法学部　岡村可奈子さん

「FLPがあるので中央大学を選びました」という。目をつけたのは、「地球社会の深刻な貧困問題の解決に貢献できる人材の育成をめざす」FLP国際協力プログラムだ。

中学生のころから国際協力に興味を持ち、高校卒業後の研修旅行で高校の先生の引率で「世界最貧国の一つ」といわれるラオスへ行った。この初の海外経験が本格的に国際協力を意識するきっかけになった。

ラオスで最も印象的だったのは、都市や農村の学校を見学し、国際協力の重要性を知ったことだった。

「学校の先生は『ここには何もない』というけれど、建物もあるし、黒板だって机もある。でも『もっともっと』と言う。具体的に何が欲しいのか私たちにはわからないんです」。そこで、「もっと貧しいところもあるはずだ」と、日本人の男性がラオスに自費で建てた学校を見に行った。

「初めに見た学校よりもひどくて、『最近やっと壁がついてよかった』とその男性が言っていたぐらい」だった。それでも子供たちの学び舎である。「本当に必要なものは何か。どのような支援をしたらいいのかを考え、国際協力は大変だと思いました」という。

国際協力に関心を持ち始めた岡村さんが、FLPのある中央大学に進学したのは、こんな伏線があったのだ。FLPでは法律と国際協力に関する佐藤恵太教授のゼミに入った。知的財産法が専門の佐藤教授が現地の法整備支援に携わっている関係で、ゼミでは毎年10日間ほどベトナムへ研修に行った。そこで、現地に派遣された日本の裁判官、検事、弁護士が、ベトナム司法省と一緒に法律を組み立てていく現場を見たりした。4年次には、カンボジア法整備支援の現場を見に、一人でプノンペンにも行った。

現地の学生が大学で法律を学んでいるのを見たとき、「お金がなければ学校に入れないし、農家だったら都市にも来られないかもしれない」などと考えた。学校で学ぶには経済事情や生活環境、交通路など様々な要素が関係していることに気づいた。「法整備支援だけでなく、そこに辿り着くまでの国際協力全体の流れを見たい」と考えるようになっていった。「国際協力は誰かのためだけではない。やりたいと思う自分のためにやるんでしょ」という教授の言葉も国際協力を目指す目的を見直すきっかけとなった。

今春からJICAの職員になる。高校時代からの志向が、就職に際し必然的に「国際協力の根幹のJICA」へと結びついた。接客が好きで、「大学院に行ってJICAを受けて、それでもだめだったらサービス業を考えていました」という。「国際協力は究極のサービス業」というJICAの人の言葉が印象に残っているという岡村さん。4月からは、いよいよその実践の場へ足を踏み入れる。

（武田）

ピンクリボンデザイン大賞に入賞
人に支えられた趣味の広告と茶道

経済学部　清水良彦さん

「趣味は広告」と言い切る。これまでに、乳がんのシンボルマークで知られるピンクリボンフェスティバル２００８デザイン大賞に入選、オリックスグループ6社が共催する学生キャッチコピーコンテストでも社長賞に輝いた実績がある。

キャリアセンターや生協の掲示板でコンテストをみつけ、挑戦したという。「インターネットで『コピーコンテスト』と検索したら、一番上にヒットしたのがオリックスだったんです」とにこやかに語る。「6社分、キャッチコピー500本は書いたと思います」。

「コピーライターになりたくて」と、広告関係ゼミの商学部の飯田朝子教授に言ったことがある。「一緒に行く？」と言われ、代理店の見学に同行させてもらった。『風とロック』で知られる箭内道彦さんのトークイベントで、「きみサンボマスター？」と指名されて対談したこともあるとか。確かに似ている。「緊張して全然話せなかったけど、この見た目でよかったと思いました」（笑い）。人知れず努力しているのだ。

学生キャッチコピーコンテストでは、女性向けの商品コピー『保険くらい、理想のタイプで』でオリックス生命保険の社長賞を獲得。表彰式では、「ピンクリボン運動についてなど、関わりのあるテーマに臨んだ話をして話が弾んだ」と振り返る。

そんな清水さんのもうひとつの趣味が、サークルでたしなむ「茶道」である。お茶は、「茶道の先生をしている叔母に勧められて」大学からはじめた。茶道会の江戸千家と呼ばれる15名ほどの組織に所属している。

茶会には細やかな気配りが必要なだけに、「気配りができるようになりました」という。年4回ある定例茶会の中でも11月初めの白門祭と11月末の白門茶会はメインイベント。「白門祭では一般のお客さんを。白門茶会は学外で、他大の茶道会やOBを招待します」。これまでに靖国神社や五島美術館、茶道会館を借りて開催してきたという。

苦い思い出もある。「2年の時です。お茶を運ぶ『お運び』をやっていたのですが、出す場所を間違ったみたいで。相手はOGさんで、首を傾げられてしまいました。後ろの先輩が『もうチョイこっち…!!』と焦っていたっけ。あれは怖かった」という。

「始めて2、3ヵ月はつまらないですよ、見てるだけだから。でもシステムがしっかりしているところとか、お茶碗の種類とか、覚えるとだんだん面白くなってくるんです」

自らのことを「ネガティブのかたまり」、「失敗したくない恐がり」と評する。「それでも、頑張った分だけ結果がついてきたように思います。本当に周りの人に支えられましたね。今になってそう思います」。やはり感謝の気配りは忘れなかった。

（竹下）

長期休みは海外でボランティア 能力伸ばし社会に還元できる人に

経済学部　石川　渚さん

驚くほどパワフルだ。1年生の夏休みに、ワークキャンプでフィリピンの孤児院へ行き、それを終えるとすぐにタイ・カンボジア旅行へ。カンボジアでは、友人がNGOのワークキャンプに参加していたこともあり、NGOの活動を見学。これがきっかけとなり、翌春の2月に1ヶ月間NGOへ留学。そしてその足でマレーシアでのボランティアのトレーニングに参加した。

2年生の夏には、再度カンボジアへ行き、翌春にはインドを1ヶ月半旅行。3年生の夏には、ゼミの調査でフィリピンへ行き、2度目のインドへも行った。さらに、1年生の時から習っていた英会話を実際に試してみたいと思い、アメリカを3週間旅した。

長期の休みのほとんどを海外で過してきたことになる。この行動力はいったいどこから来ているのだろうか。

大学進学で経済学部の国際経済学科を選択したのは、「途上国のことをメインに勉強したい。自分の目で確かめたい。頭で考えたい」と思ったからだった。幼い頃に旅行でタイやフィリピンへ行った時に見てきたものを深く知りたくなったのだ。

「初めてボランティアでフィリピンを訪れた時は、かわいそうだから、支援したいからという気持ちが強かった」と当時の気持ちを振り返る。しかし、この活動に参加して「現地の人とはフェアな関係。自分自身も学ぶことが多くて、とても成長させてもらった」と語る。

「自分と同じ歳の子が夢を見れない」という現実を目にし、「客観的に日本の生活、自分の恵まれている環境を見ることができた」という。「自分には機会があるのだから自分の能力を伸ばそう」と考えるようになった。この経験により、石川さんの中で「ボランティアという形で社会に還元するよりも、実際に必要とされる形に、つまり具現化し、将来的にはプロジェクトなりなんなりを動かせる人材になっていきたい」という考えが生まれたという。

3年生からはゼミに力を入れた。ゼミでは、マイクロファイナンスをテーマに研究。「ゼミの先生が自由にやらせてくれた。周りの人が頑張っていて、その中にいたから自分も頑張れた。良い仲間に出会えた」と語る。

「海外でも日本でもいい出会いをいっぱいした」と大学4年間を振り返り、今後については「希望とか元気を与えられる人になれたら嬉しい」と目を輝かせた。

卒業後の進路は、ベンチャー企業に決めた。「苦しくても能力を得て、社会に何かを還元できる人材になっていきたい」と意気込む。石川さんは、大学最後の春休みにエジプトからギリシャ、さらにドイツと2ヶ月の旅に出た。「大学生活に悔い無し」と笑った。

（上田）

世界経済論で勉強の楽しさ気づく
大学院に進学し、ドクター目指す

経済学部　オウナさん

「日本の経済力、その発展の原因を見つけたい」という理由で、日本の大学に留学を決めたオウナさん。中国では日本の製品を目にすることが多かったため、日本の生産力に関心を寄せていたという。この春からは、中央大学大学院経済学研究科へ進学、さらに研究を深める。大学院では「中国における所得格差」をテーマに研究する予定だ。

志の高さがうかがえるオウナさんだが、意外にも1年生の頃はあまり真面目ではなかったと語る。「アルバイトが忙しかったから学校に来る時間は少なかったです。ゼミも2年生のときに半年くらいやって辞めてしまいました」。

もっとも、日本人とのコミュニケーションや日本の文化、習慣は、ほとんどアルバイトで学んだという。さらに、日本語の習熟度に合わせてアルバイトも変えていたというのだから、常に学ぶ姿勢のある人だ。

2年生の後半に転機が訪れた。「世界経済論の授業がきっかけで、勉強にすごい興味を持つようになって、勉強が一番自分を充実させることができる」と思い始めた。その授業では、日経新聞を読んでテーマを決め、感想文を毎週提出する。このため、アルバイトから帰ってから、2時間くらい新聞を読みようにした。「きつかったけどとても楽しかったし、書く能力もすごくつきました」。

流暢な日本語で、こう語るオウナさんの姿からは、確かな自信が伝わってきた。この授業を機に、3年次では自分の関心に合わせて難しい授業も多く履修するようになったという。授業での辛さを乗り越えたことが、「学生生活で一番嬉しかった」ことだ。

もう一つ、〝就活〟にも力を注いだ。

「3年生のときは、就職か進学かすごく迷いました。友達に『せっかく日本に来たんだから就活やってみなよ』とアドバイスされて、進学も視野に入れて就活をしました」。ただ、自分には合わないことが分かり、4月に就活は打ち切って進学の準備を始めた。

「就職活動をしたことで、いろいろ自分を見つけることができた」というが、今はドクターまで勉強すると決めている。就活で自分には英語力が足りないことも痛感し、大学院に進学後は、英語圏への留学も考えている。

「自分のやりたいことは、思いついたらすぐ行動して下さい。学生時代にしかできないことは、悔いの残らないようにチャレンジすることが大切です」。これがオウナさんが後輩たちに贈るメッセージだ。（池野）

編入で勉強したい学問に出会う
海外を巡り、知識の重要性再確認

商学部　三浦崇顕さん

中大には3年次に商学部経営学科に編入した。その前に1年間、編入前に在籍していた大学2年の後期から休学して旅に出た。「イギリスから中国まで22カ国を旅してまわりました」という。「初めての海外だったんです」と笑った。

前の大学では自然科学を専攻していたが、中大では経済に勉強内容が大きく変わった。「旅に出て、変わったというわけではないんです。旅で自分が本当にやりたいことを見つめ直したという感じかな」と話してくれた。

「9・11のイメージが強かったため中東イスラム圏には多少偏見がありました。しかし、実際に自分の目で見て、聞くことで偏見はなくなりました。また、物事を理解するためには知識が必要だと再確認しました」と旅での体験で多くのものを会得した。

22カ国を旅するというのは半端な気持ちではできないのではないだろう。しかし、三浦さんに「不安はなかった」という。

編入のため、経済を勉強できるのは2年間。そこで大学院に行くという目標を編入した時から持っていた。大学生活ではゼミ活動に力を注ぎ、ビジネス英語を学べる林田博光ゼミに入った。

ゼミでは海外企業訪問があり、シンガポールの企業を訪問した。「その時に英語で質問する機会があったんですが、思っていたより上手く話せなかったんです。友達としゃべる時の英語と公式の場での英語の違いを感じました。もっとがんばらなければ、と思いましたね」。

また、演習論文大会ではプレゼンテーション部門で商学部長賞を受賞。卒業論文は『円と日本経済の現状分析―為替レートと国際収支を通して―』をテーマに書いた。テーマは3年生の時に構想し、本などを読み込んで資料集めをしたそうだ。「為替の重要性を書き、日本経済を主体的に見る力をつけたかった」という。

中大では「勉強したいと思える学問に出会えた」と振り返る。卒業後はイギリスの大学院へ進学する。9月から1年間、経済学部でファイナンス理論や国際貿易、国際金融を学ぶ。

「5月ごろにシベリア鉄道などを使って陸路をイギリスまで行こうかなと思っているんです」と新たな旅の計画を笑顔で話してくれた。

（野村）

国際俳優として飛躍目指す
南アでの高校時代が転機に

商学部 美馬康平さん

「はじめまして」と爽やかな挨拶。意志の強そうな目元が印象的だ。美馬さんは、国際俳優として飛躍を目指す25歳。監督志望でもある。

幼少時は父親の仕事の都合でドイツで過ごした。「借りてきたビデオを見て『インディージョーンズ』や『ジュラシックパーク』に夢中でした」。ここに、映画をつくりたい、と考えるようになったルーツがあるという。

高校2年のとき、再び海外で暮らす機会があった。場所は南アフリカ。それまでは、「とくに外に向かって自分を出そうとすることはありませんでした。英語も話せなかった」という美馬さんに転機が訪れる。

学校には『ハウス』と呼ばれる寮があり、同じ所属の学生が縦でつながっていた。また、学生の頑張りをポイント制にして、頑張った学生は視覚的にわかるようにするユニークなシステムがあった。「文化面で活躍した人は制服の色が白に変わる、とか。スポーツや他の分野でも同様です」。力を注いだことをダイレクトに評価し、共有する土台がそこにあった。

学生時代はバンドを組み、サックスを演奏していた。友人たちは、言葉が通じなくても理解するまでトコトン伝えようとしてくれる。「表現していいんだな、表現しようとすれば伝わるんだな」と感じるようになっていった。そんな折り、両親の友人の紹介で、ドラマの撮影に来ていた俳優の大沢たかおさんに会う機会があり、「目指していた分野で働いている人だ」と感激した。

南アで大学を卒業後、日本に戻ってから中央大学に入った。芝居の勉強を始めるため、学内のサークルではなく、学外での活動を選んだ。モデル業を始め、そこの先輩に勧められて東京学生英語劇連盟に関わるようにもなった。「音楽にしろ芝居にしろ、人前で表現することの醍醐味は共通していますね」という。

そこでアメリカ映画『バベル(Babel)』のキャスティングにも関わった奈良橋陽子さんに出会った。「あなたは何やりたいの」との問いに、「役者をやりたい」と返した美馬さんに、UPSアカデミーで学ぶ機会ができた。2005年からここでの活動をはじめ、今年で4年目に入る。

初めてオーディションを受けたのは『バベル』だった。「結果は不合格。『どう見られるか』に気がいってしまったように思います」。やはり落ち込んだ。「どれだけ自分をコミットできるか、なんです。でもひとたび決まれば別。役を深める責任があると思う」と自らに納得させるように頷いた。

鍛えた英語力を活かし、英BBCが製作した時代劇『SHOGUN』では松平忠吉役を演じた。「自分のどんな感情も否定せず、リアルを描く役者になりたい」と、今春からは新しい事務所での活動がはじまる。「これから先は自分に投資できる時間が増えるので楽しみです」と前を見据えた。

（竹下）

ドイツ語に磨きをかけた4年間 ポジティブに留学で40単位履修

文学部　山下美貴さん

ドイツ文学文化専攻の山下さん。文学部の中でもドイツ文学に入学を決めたのは、高校1年の夏休みにドイツでホームステイしたことがきっかけになった。

「ホームマザーと、思うようにコミュニケーションが出来なかったんです。帰ってきて感じたことは、ただ“悔しい”だった」という。当時は英語で夢を見るほどうなされたという。それほどまでに、17歳の山下さんにドイツ語が大きな壁になっていたのだ。

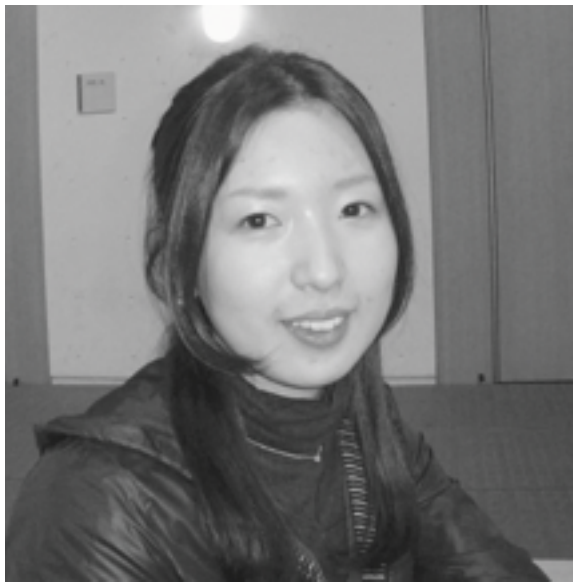
高校3年になり進路を考えるとき、ホームステイ先の家族を思い出した。「ドイツの現地の人と話せるようになりたい」。そんな強い思いを胸に、中央大学に入学した。

「中央大学では4年間、ドイツに行けるだけ行きました」という通り、まず大学1年の夏にドイツへ短期留学をする。大学で勉強したことを試したかったからだ。ただ、その時も「ある程度、相手の言っていることがわかるから、もどかしくてより悔しかった」。

次にチャレンジしたのは、1年間の留学。入学時から考えていた計画だ。留学するためのテストに向けて必死に勉強し、見事、留学のチケットを手に入れた。

1年間のドイツ生活を振り返るとき、山下さんには笑顔が絶えない。「寮に住むのが嫌だったので、シェアルームをしました。ドイツ人のOLの方でお姉さんみたいだった」。生活面では〝お姉さん〟にサポートしてもらったという。一緒に寿司パーティをしたり、お味噌汁をつくったりして、ホームシックになることはなかったそうだ。

留学先のベルリン自由大学では、冬学期と夏学期と目標を定めて勉強した。冬学期は、日常会話を身につけるためタンデム（ドイツ語を習う代わりに、日本語を勉強しているドイツ人に日本語を教える）をたくさん行ったという。2人のタンデムパートナーとは今でも交流があり、「日本に留学に来るの！」と嬉しそうに話してくれた。



夏学期では、「4年生で卒業する」という目標のため単位習得に励んだ。自分自身を覚えてもらうように授業後、教授とのコミュニケーションを心がけた。

「今日は全く分からなかったわ。だけどここはこういうことよね？」「そうよ！ひとつでもわかったならよかったじゃない！」

学生はちょっと怖気づいて教授になかなか話せないものだ。その積極性と度胸があって、ドイツで留学で認定される限界の40単位を（日本で換算すると30単位）履修した。そのため帰国後、4年生での卒業が決まり、就職先にドイツメーカーの代理店を得た。

「うちの会社でドイツ語を出来る子がいないから、是非任せたい」。採用担当者からは、そんな言葉をかけられた。かつては大きな壁だったドイツ語が、努力の結果、これからは自らを援けることになった。

（新部）

日本拳法一筋に真剣に打ち込む
春からは母校高校の教壇に立つ

文学部　夏山大軌さん

在学中の4年間は日本拳法部に所属し、その後の1年間は、教職をとるために大学に残り、勉強を続けた。この春には国語の先生として母校の高校の教壇に立つことが決まっている。

日本拳法という競技は、顔、手、腹に面やグローブをつけ、打ち合い、先に2本とったほうが勝ちというポイント制の総合格闘技だ。夏山さんは、高校生のときに勧誘されて日本拳法を始めた。当初、「全く興味がなかった」が、あまりの執拗な勧誘に根負けして入部を決意したという。しかし、部の雰囲気は厳しいものだった。なにしろ総合格闘技だけに、練習でも容赦はない。「先輩からはとくに目をかけられた」と笑う。

でも「やめたいと思ったことは一度もない」ときっぱり言う。「一番辛いことをしたら強くなれるのではないか」という一念で、3年間続けた。毎日、毎日、ひとつ、ひとつ積み重ねた努力が実を結んだ。高校日本一のタイトルを得ることができたのだ。

大学は先輩がいた中央大学を選んだ。大学での練習は、高校ほどは厳しくはなかったというが、月曜から土曜まで毎日2時間、「相手を力で潰せるような力を身につけることだけを考えて練習に取り組んだ」。加えて週に3日、八王子にあるジムに自主的にトレーニングに通った。

キャプテンとして部をとりまとめる責任を担ったが、「苦労を感じたことは全くないですよ。プレッシャーに感じたこともない。後輩たちがひとつになってまとまってくれたからなんです」と屈託がない。ただ、「相手に負けたくない」という気持ちは人一倍強く、「やる時は集中して練習した」と自らを振り返った。キャプテンとして自ら範を垂れたのだろう。しかし、「他の部員の方が自分よりももっと練習していましたよ」と部員を立てる。

キャプテンとなって、チームを東日本トーナメントで優勝へと導いた。さらに個人としても東日本トーナメントで2年連続優勝、全日本大会でも2年連続準優勝という輝かしい成績を残した。

「後輩や同期に助けられた。自分の言うことに異義を唱えるのはいなかった。みんな一つになって自分の後をついてきてくれた」と、周囲への感謝の気持ちを忘れない。寮生活も貴重な大学の思い出の一つで、「他の部の意識の高い友達もたくさんいて、いい刺激になった」という。

春からは、母校の高校教師になるが、「ひとつの事を真剣にやり通す、熱い気持ち」で立ち向かっていく覚悟だ。そして、「一人の生徒の何かを変えたい」と話してくれた。後輩たちには、「何か一つを踏み込んでやって欲しい。結果とかは抜きで」とメッセージを送る。結果を出した人だからこそ言える、重みのある言葉である。

（今子）

監督、同僚、友人すべてに「感謝」
フェンシング一筋にロンドン目指す

文学部　千田健太さん

2月中旬、イタリアのベネチアで行われたW杯グランプリ男子フルーレ団体で、千田さんと北京オリンピック個人銀メダリストの太田雄貴さんらがメンバーの日本は、決勝で英国を下して優勝し、金メダルに輝いた。

卒業を前に有終の美を飾った千田さんは、「フェンシングと大学の授業の両立は、本当に大変だった」と振り返る。海外遠征などが多く、授業にはなかなか出られなかった。「ノートが取れないので、クラスの仲間や友人に助けてもらった」。フェンシング部の同学年は3人しかいなかったため、「自分がいないとき、ほかの2人がハードな部の仕事を文句も言わずこなしてくれた。本当に感謝です」という。

大学入学当初は、「なかなか思うような成績が出せなかった」ため、フェンシングを続けるか、迷う時もあったが、2年生の秋に関東学生選手権で優勝したのをきっかけに、フェンシング一色の生活に変わった。

授業が終わった後、八王子から西が丘にある国立科学スポーツセンターまで練習に行く日々が続いた。寮に帰り着くのは、いつも夜の11時を回っていた。そして2006年エジプトで行われたグランプリで世界3位に輝いた。ここで、「北京オリンピックへの手ごたえを強く感じた」という。

部の練習に加えて、自らに課してきたプラスアルファの練習の成果が実を結んできたのだ。同時に、千田さんは、フェンシング部を通じて、「ハングリー精神が鍛えられ、精神的に強くなれたとからです」と語った。さらに、「戸田壮介監督が自分をオリンピックレベルまで引き上げて下さった。中大に来て、戸田監督に出会えて本当に良かった」と、ここでも感謝の気持ちをあらわした。

4年生に上がる頃、日本フェンシング協会から北京オリンピック前の「500日合宿」に参加するようにと声がかかった。集められたのは、日本トップレベルの選手ばかりだった。ここで、朝9時から夜9時まで続く、超ハードな練習をこなした。

日本代表で出場した北京オリンピックでは、この合宿の成果を結びつけることができず、「正直悔しい」と振り返る。

次の目標は、「一試合、一試合を大切にし、3年後のロンドンオリンピックを見据えている」という。それには、ライバルで、良き友人でもある「太田雄貴選手に勝つことです」と言い切った。当面の目標は、「今年の10月にトルコで開かれる世界選手権です」と強い眼差しを向けた。

卒業後は、フェンシングに集中できる環境を整えてくれる企業に所属する。学生生活でやり残したことはとの問いに、千田さんは、明るく「ありません」と即答した。（梶原）

『新聞ブログ』で全国の小学校巡り 取材し、記事を書く楽しさを教える

総合政策学部 平澤恵梨さん

『新聞ブログ』―。写真、記事をブログに入力するだけで、簡単に新聞風のレイアウトに編集され、Web上で閲覧することができるものだ。松野良一ゼミが企業と共同で開発し、「JIDPO日本産業デザイン振興会」が主催する2007年度グッドデザイン賞を受賞した。

平澤さんは、『新聞ブログ』プロデュースチームの一員として、このシステムが小学生に簡単に使えるかどうかという実証実験を担当した。これを使えば簡単に学級新聞をつくることができる。全国の小学生に記事を書いてもらい、もっと新聞に興味を持ってもらおうというプロジェクトを展開、その成果がグッドデザイン賞につながった。

平澤さんがプロジェクトに参加したのは、「新聞の価値の重さに気づいてほしかった」からだ。新聞は、見出しの大きさで、情報の重要度がわかる。更に、前文を読むだけでも、記事の概要が分かる。見出しをみて、前文を読み、次に記事の本文を読む。段階的に内容を理解しやすいつくりになっているのだ。

「新聞型にレイアウトされた記事を、Webに上げることができるようにしたのは、全国の小学校の記事を、子どもたちがお互いに読みあって、インターネット上で会話できたら面白いなと思ったからです」

平澤さんは、『新聞ブログ』が新しいメディア教育になることにも関心をもった。「沖縄の小学生が、北海道の小学生の記事を読んで『雪ってこんな感じなんだね』って話し合えたりできるんです」と。

プロジェクトでは、小学生が『新聞ブログ』を利用して、自分たちで取材をし、新聞記事を作成する。新聞が嫌いだったり、文章を書くことが苦手だったりした小学生達が、新聞をつくり終えると「嫌いだった作文が、少し好きになった」とか「町のいろんなところに行って取材したい」などと関心を持つようになる。

多くの小学校を回り、辛くなることもあったという。「でも、小学生から『楽しかった！』とか『また来てね！』って笑顔で言われると、もう続けるしかない、って思った」と振り返る。「達成感＋αを感じてほしい」。平澤さんの子どもたちに対するメッセージだ。

卒業後は、広告会社に就職が決まっている。「記者になろうと思っていた時期もあった」というが、あらゆる年代の人に、分かりやすく情報を伝えられる広告媒体を作りたいと思い、広告会社に就職を決めた。

「生きることの大切さとか、戦争とか。そういう普遍的なことを、分かりやすく簡単に、色々な人に伝えていきたい」と力強い口調で答えてくれた。

好きなキャラクターは「ドラえもん」。理由は、アニメの深意にある。「ドラえもんは、秘密道具を使うことで『日常を違う視点から見ると、世界が変わるよ』ってことを分かりやすく伝えてるんだよ。深いよね」と笑顔で語ってくれた。そして次のように言い切った。「私も広告の世界で、そういう事をしたい」。

（西野）

スリランカの旅行会社でインターン
独自のツアープランつくり、営業も

総合政策学部　白石佳菜江さん

白石さんは、インターンシップで1年間、スリランカの旅行会社で仕事をした。国際インターンシッププログラムで、1年次、2年次にスリランカの開発について学んだのがきっかけで、スリランカに興味を持つようになった。

「先生の指導方針は、国際的なコミュニケーション力と社会人としてのマナーを身につけさせて、世の中へ出ても恥ずかしくない学生を育てるということでした。そのためにどんどん大学の外へ出て行動しなさい、言われました」

そこで行動に移したのが、スリランカでのインターンシップだ。だが、受け入れ先がなかなか決まらず、「スリランカ大使館のイベントに参加して自分で人脈をつくりました」という。そのイベントでスリランカのボランティア活動を統括している人と出会い、履歴書を渡し、スリランカの旅行会社を紹介してもらうことができた。

スリランカに赴いた会社で配属されたのは、日本担当だった。「旅行者への車の手配や、ホテルの手配など行うインバウンドオペレーターとして働いた」。

しかし、仕事で壁にぶつかった。「日本人のお客さんは、社長の個人的な付き合いのある人たちだけで、ほとんど仕事はありませんでした」。担当する仕事がなく、「たまに見積書をつくる程度で、何をしたらいいのかわからない状況でした」と当時の苦労を語る。

だが、白石さんはへこたれなかった。一念発起して行動に出たのだ。まず、スリランカツアーを行っている日本の旅行会社をすべて洗い出し、日本ではどんなツアーが一般的なのか、いくらだったら売れるのか、などのマーケティング調査を行った。

それを元に独自の旅行プランを立て、見積もりをつくり、それを日本語にして営業用資料を作成した。その資料や、翻訳した社長の手紙を添えて、スリランカツアーをまだ行っていない日本の旅行会社に送った。

日本人を送り込んで欲しい、電話で懸命に営業活動したが、結果は失敗に終わった。「日本の旅行会社は、相手が学生という理由で取り合ってくれませんでした。直接会って営業すれば、うまくいったのではないかと少し後悔しています」と白石さん。

卒業後は、日本の旅行会社で働く。ただ、長く勤務するつもりはないという。「これまでとは逆に、日本から見た海外旅行を勉強したい。そのために大学院にいけたらいいなと思っています」と新たな目標に向けた挑戦が続く。

（伊藤）

高校で「人の役に立ちたい」とFLPでの体験活かし新聞記者に

総合政策学部　菊地雅敏さん

「マザーテレサに憧れて、人の役に立ちたいと思ってきました」。その願いが叶い、菊地雅敏さんは、今春、朝日新聞社への就職が決まっている。

FLPジャーナリズムプログラムの松本正ゼミに所属し、ミニコミ紙づくりに力を入れてきた。ミニコミ紙の制作は、ゼミ生自身が八王子で活躍している人を探し、取材をし、記事を書き、レイアウトを行う。菊地さんはこの活動に「大学生活のほとんどを費やした」という。それも、新聞記者になるためであった。

マザーテレサへの憧れから看護師になろうと思っていたが、「高校の時、広島平和祈念式典に参加したことがきっかけで、新聞記者になろうと考えるようになった」という。

「自由時間に市主催の語り部さんのお話を一人で聞きに行きました。会場には僕以外に3人の高校生しかいませんでした。語り部さんのお話は順番がめちゃくちゃで、泣きながら話したりして、内容がよく分かりませんでした」と振り返る。だが、最後の一言に心を打たれた。「君たちにはこのような辛いことを人に伝えられる人になってほしい」と。

講演会の後、菊地さんは中国新聞の記者が語り部さんに取材しているのに立ち会った。菊地さんたちも取材された。次の日の中国新聞に語り部さんの話が載っていた。それを見た菊地さんは、新聞記者という仕事を知った。そしてその職業を身近に感じた。

「たった4人に話した話が、新聞に載ると多くの人に読んでもらえるんだな」と思い、人に伝えることの素晴らしさを感じたという。

ゼミの活動を進めていく中で、新聞記者に向いていないのではないか、と迷うこともあった。「ミニコミ紙は楽しい記事しか扱いません。だけど新聞は、世の中の不幸な話もとりあげます。被害者などに話を聞かなくてはならず、それはとても辛いことだと思った」からだった。だが、「FLPで、不幸な話を取り上げる意義が分かりました。それは社会に必要なことなんです。新聞記者は、人の役に立ちたいという僕の根本の夢に合致していました」ということに気づいた。

「広島で中国新聞の記者さんに会えたのは偶然。新聞記者になれるとは思っていなかったけれど、FLPのある中大に入り、松本ゼミに入ることができたのも偶然。こうやって偶然を活かすことができてうれしいです」と、菊地さんは人懐っこい笑顔で満足そうに大学時代を振り返った。

（橋本あ）

「CREW」で仲間とともに就活支援
人の成長に携わりたいと大学職員に

理工学部 松木 崇さん

理工学部に「CREW」という学生組織がある。「CREW」とは「Chuo Relationship Encourage Win out」の頭文字をとったものだ。

学内での就職活動のイベントを企画・運営して、就活中の3年生や大学院1年生のサポートなどを行っている。経営システム工学専攻修士2年の松木さんは、「CREW」のリーダーとして活動してきた。

取材に同席したCREWのメンバー全員も同じ修士2年生。互いにニックネームで呼び合い、まるでサークルの仲間のように仲が良く、賑やかだ。

「修士2年の5月、就活を終えてキャリアセンターに書類を提出しに行ったんです。すると職員の方に、CREWの活動もしてみないかと突然誘われて…」というのが、松木さんがCREWに参加したきっかけだ。

他のCREWのメンバーの多くも、同じような経緯で参加したという。初対面同士が仲がよくなったのは、「イベント内容や、会場となる場所の確保、運営などを全て自分たちで行ううちに、コミュニケーションが広がっていった」からだ。

イベント企画の一つとして、自らが面接官となって就職のための模擬面接も行った。「いかにして学生の性格や本音の気持ちを引き出すかが難しかった。その場の雰囲気を和ませるために、学生の趣味の話から始めたり、いろいろと工夫したりしました。本当に、こちらの聞き方一つで答えが大きく変わってくる」と松木さん。

CREWの活動を始めてから、自分自身の就活のとき以上に企業の情報を集め、面接の勉強をしたという。後輩たちが納得いく就活を送れるようにと、メンバーは一致団結し活動した。

松木さんの活動はこれだけではない。学部1年から4年までは他大学の公認サークルである『しいのみ子ども会』というボランティアサークルに所属していた。

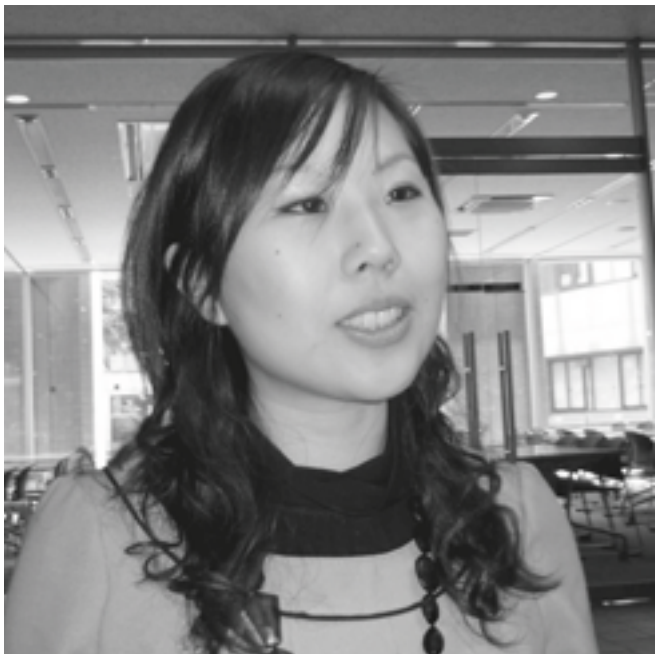
親御さんの了解を得て、小学校1年生から6年生までの子どもたちを大学生だけで預かり、動物園に行ったり、夏休みには2～3日間のキャンプにも連れて行ったという。「もともと子どもが好きなんです」と松木さんは笑顔で目を輝かせた。

就職で松木さん自身は、大学職員の道を選んだ。春からは、早稲田大学での仕事がはじまる。「人の成長に携われる教育に興味があって、それならば幅広く学生をサポートする大学職員がいいと考えました。理系で学んだことは産学連携などに活かせると思う」と自信と希望に満ちた表情で語った。

（小室）

シアトル留学体験が視野広げる
挑戦し、出会いの大切さ知る

理工学部　前川あすかさん



「視野を広げたかったんです」―。1年休学して留学した動機がこれだ。

2007年4月から翌年3月までアメリカ北西部の都市シアトルにあるワシントン大学に留学した。実験などに追われる理工学部で留学する学生は、文化系学部に比べ少ない。前川さんは、そんな一人だ。

「中大理工の学生はみんな、考え方が同じだなと感じていた」という。そんな中、インターンシップで出会った人に刺激を受け、「大学4年間のうちにもっと色々なことに挑戦したい」と思うようになった。そして「英語力を身につければ世界中の人と気持ちを伝え合える」と。

思い立ったら行動は早かった。3年生のとき偶然、テンプスタッフの留学スカラッシプ制度を見つけた。応募締切日ギリギリだった。作文などの提出書類をまとめ上げ、見事合格した。その日は、間違いなく前川さんの人生の転機になった。

ワシントン大学ではビジネスコースを専攻し、前半は主に英語を、後半はビジネスマーケティングを学んだ。それだけではない。前川さんは大学のカリキュラムとは関係なく、自らの意思でインターンシップを始めようと思い、現地で受け入れ先を探し求め、ショッピングセンターで、コンシェルジュの仕事をした。

「入口で施設の案内や、観光客にベストな観光コースを提供したりする」のが仕事。「初めは語学力が足りなく苦労しました。まして観光案内をするには地元の人よりも街に詳しくならなければならない」。そう思った前川さんは、シアトルの街を歩き回り、たくさんのレストランにも入って情報を集めた。「ここで人との触れ合いや、出会いの大切さを実感しました」という。

しかし、留学は決して良いことばかりではなかった。ホームステイ先はフィリピン人のシングルマザーの家で、「事前に日本で言われていたこととは大きく違っていた」。食事の制限をされたり、部屋が汚かったり。「毎日のようにけんかをしましたが、英語力をもっと身に着けないと言いたいことが言えないと強く感じました」と振り返る。

自分で探して住むところをかえた。留学して4ヶ月後には、シェアハウスでの生活が始まった。家賃を分担し、世界中からの留学生のルームメイトと生活をする毎日。「楽しかった。各国の料理を作ったり、パーティーをしたり。友達の友達が新しい友達になるんです」と目を輝かせた。

自らの留学で得た貴重な体験に立って、「ためらう時間があったら、半歩でも踏み出して」と後輩たちにアドバイス。春からは、慶応大学大学院経営管理研究科に進学、新たな学舎に踏み出す。

（小室）

教職授業で、帰宅はいつも夜 働き続けられる資格の取得を

理工学部　清水時子さん

教職課程の授業を1年生から受け続けた。経営システム工学科で、教職をとったのはわずか4人で、しかも「女性は一人だった」という。

文字通り「経営」と「工学」が合わさった経営システム工学科は、文系の経営の勉強もしながら理系の工学の勉強もするという学科だ。進路も関心の度合いによって「経営」と「工学」に分かれがちになる。また、広く知識が得られる学科なので、公認会計士や弁理士、税理士など自分が興味を持った資格を取る人も多い。その中で清水さんは教職を選んだ。

「授業は全て午後6時から始まるので、終わって帰るのは夜の10時半を過ぎるのが当たり前でした。とても大変でした」という。

また、教職はレポート課題が多い。学科の授業でも、2、3年になるとレポートが多くなるため、週に7つも8つもレポートを仕上げる日々が続いた。それでも、「教職の授業も通常の学科と同様に、GPAに入るので、学科内での成績はかなり良かったですよ」と言って、笑った。

「教職は特に女性に取ってもらいたい資格です」と清水さん。「国が関わっている資格なので切れることはありませんし、子供を産んだりして一度仕事を辞めたあとでも社会復帰しやすい」という理由からだ。

清水さんは「将来もずっと働き続けたい」と思い、春からは大学院に進学する。就職も考えたが、「就職先が決まっていく仲間の話を聞くと、みんなSEになっていて。私はせっかく理工学部に入ったのだから理系ならではの仕事に就きたい」と考えるようになった。

就職活動を通して、「未来の道を考える。自分がどう生きたいかを逆算していく人生逆算法が必要だと、非常に強く感じました」という。

先の生活設計を描きながら、「大学院に進んでからは、ITパスポートや簿記などの資格をとることも考えています」と資格取得にますます意欲を見せている。

将来については、「生物統計分野を専門にして、医療品、製薬会社、薬剤会社などでの解析業務を研究職として続けていければいいなと思っています」と語ってくれた。

（橋本奈）

「粘り強さ」で学年トップの成績
大学院に進み、研究に専念へ

理工学部　大根田知也さん

「大学での成績が学年トップになったときは、にわかに信じられなかったです」と大根田さんは、そのときを思い起こすように語り出した。高校の担任の先生からは、「理系には向いていない」と言われていたというだけに、自身にとってもサプライズだったようだ。

「自分の持ち味の『粘り強さ』によるものだと思う」と自己分析し、「勉強を計画立てて行うことが楽しく、試験1ヶ月前から計画をたて、試験に望んでいたんです」という。

理系に関心をもったのは、中央大学高等学校2年の時に、オープンキャンパスで見学した理工学部経営システム工学科の研究室のデモンストレーションに「大きな衝撃」を受けたのがきっかけだった。

これを機に勉強するようになり、「もともとよくなかった」という成績は徐々にアップ。高校の担任の先生から「理系っぽくない、文系に進まないのか、と思っていたが、努力で何とかなるものなんだなと思った」と言われるまでに成績が上がり、推薦で中央大学理工学部経営システム工学科に入学することができた。

大学では、ちょっとした〝挫折〟を味わった。卒業研究で第1希望の研究室に入れなかったのだ。「やる気がなくなり、9月くらいまでなにもできなかった」とすっかり落ち込んだという。なにより、研究するテーマが見つからなかった。そんなとき、教授から「とりあえずなにかやってみなさい。失敗しても大丈夫」とアドバイスをいただいた。「この言葉に励まされて、『やるぞ』という気持ちになった」という。

そのころ、ゼミ合宿を控え、図書館で本を読みながら、「ヒトの感性に関する研究がしたい」と考えるようになった。教授に「人の好みの起源などを研究したい」と申し出たところ、教授からヒトの視線に関する論文を紹介された。論文は英語。一ヶ月かけてようやく読み終えた。

他の人たちはかなり研究が進んでいたが、大根田さんは諦めなかった。研究室に『人の視線を測る装置』があり、これを使って卒論を書き上げることにした。本格的に卒論をまとめ始めたのは12月からだった。休みは返上。研究室には夜の11時まで残り、実験の解析を黙々とこなし、卒論をまとめ上げた。教授から研究成果をほめられ、嬉しかったという。

卒業後は大学院で引き続き学ぶ。すでに大学院の授業を10単位取っている。大学院では研究に思いっきり専念することができそうだ。

（橋本奈）

「練習は裏切らない」と学生日本一に 7種競技で、次は日本の「クイーン」

文学部　浅津このみさん

「やりたいことを頑張ってやっていれば、成果は必ず出せます。練習は裏切りません。全ては気持ち次第。気持ちがあれば何でもできます」

ここまで自信を持って言い切れるのは、裏付けがあるからだ。入学以来、懸命に練習を続けてきた努力と、その結果である。

女子陸上競技部で7種競技に取り組んできた。7種競技は、100メートルハードル▽200メートル走▽800メートル走▽走り高跳び▽走り幅跳び▽砲丸投げ▽やり投げの7種目を2日に分けて競い、順位ごとに与えられた点数で競う競技である。

特殊な競技だ。トラックを早く走る能力だけではだめ。高く跳び、そして遠くに投げる。それも7種すべての能力が高くなければ、「勝利」に届かない。

浅津さんは、昨年9月の日本学生陸上競技対抗選手権大会(インカレ)で、女子7種競技で優勝を果たした。「学生日本一」だ。関東学生（関カレ)で2連覇し、自信はあったが、「いつも試合に合わせて記録をもっていくことができなかった」と一抹の不安も。でも、「インカレではモチベーションをしっかりもっていけたから優勝できた」と笑顔で振り返る。

「日本一になるためには、何かしらが1位じゃないとダメだと思った。だから私は練習量で1位になろうって決めたんです。練習量は、他の日本の選手の誰にも負けてないと自信を持っていえます」

その言葉通り練習量は半端ではない。朝5時半から7時、午前10時から午後6時、夜の9時から10時まで、まさに陸上漬けである。さらに女子陸上競技部の主将も担っていたので、一番始めに来て最後まで残り、自分の練習もしつつ後輩を見ていたという。

主将をやると決めたときに、「嫌われてなんぼ。後輩や同期、みんなに対して厳しくしていかなくてはいけない。そのためには自分もしっかりやる。自他共に厳しくする」と覚悟したという。

ただ「考え方が一人一人違う」ので、まとめていくのが大変。だから問題が起きたらすぐ話し合いを開くようにしていた。同期の力を借りて、後輩にも全員に目がいき届くように工夫した。「同期の理解があったからこそやってこれました」と感謝する。

2年のとき、高橋賢作監督と出会い、陸上に対する考えが変わったという。「陸上を続けるなら、高橋監督しか考えられない」とこれからも親い、信頼する高橋監督のもとで陸上を続ける。

目指すは、あと一歩で手が届く7種競技の「日本チャンピオン」だ。その称号「クイーン・オブ・アスリート」を手にするには、「練習がすべて」と信ずる浅津さん。精進はさらに続く。

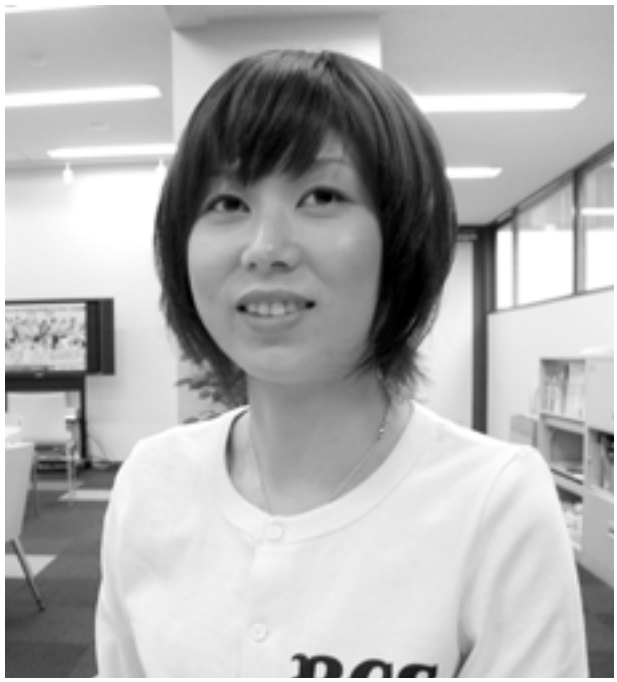
（今子）

硬式野球部マネージャー一筋に
昨春の1部復帰で、努力が実る

法学部　池田実奈さん

硬式野球部マネージャーを大学4年間、務めてきた。池田さんは「野球部のマネージャーは、高校の時からやっていて、大学でも続けたいと思うようになった」という。

小学生の頃からプロ野球を観るようになり、いつの間にか野球ファンになった。高校進学では、野球が強い高校へ行くことを決意するまでになっていた。高校時代は、野球部マネージャーとして甲子園に出場する栄誉を得た。



中大に入り、1年生の秋から硬式野球部マネージャーを務めることになった。高校の先輩が選手をしていた縁もあり、最初はマネージャーをやることに迷いもあったが決意した。

しかし、その年の秋に硬式野球部は、東都大学リーグ2部リーグへ降格してしまう。「球場から出てきた選手たちが泣いているのを見てショックだった」と当時を振り返る。

「まずは1部に上がらなきゃという雰囲気が私生活も変えていった。主務の力が大きい。選手やチームのことを思いやって行動した」

その成果は4年生になって実った。昨年の春、硬式野球部は2部で優勝、入れ替え戦を制し、1部復帰を果たしたのだ。多くの人に応援に来てもらう為に、友人はじめ2、300人にメールを送ったり、学友会や応援団に協力してもらい、キャンパス内で集客活動も行った。「応援してくれた方々のおかげで勝てました。感謝しています」と話す。

「選手がやっていること以外は全て」がマネージャーの仕事だ。グランドの中には入れないので「寮での電話番、事務の仕事、試合のときは、スコアを書いたり、ウグイス嬢をしたりします」と縁の下の力持ちだ。また週1回、体育連盟常任委員会のマネージャー会議に出席した。

休みは、週1日。「3、4年生になってからは授業も楽になり、野球にかける時間が増えていった」という。それでも、「授業はきちんと優先した。選手や男子マネージャーに比べたら、全然大変ではなかったです」と明るく笑う。「高校のときは毎日、選手よりも早く来て、遅く帰る。高校時代は上下関係も厳しかった。大学では、高校で出来なかったこと、学んだことや失敗を活かせたので大学では苦しくなかったです」。

それでも高校時代とは違い、大学では「選手やスタッフと一緒にいる時間が短いので、個人のことを知るのが大変だった」と明かした。その分、寮で話をしたり、食事をしたりして、選手やスタッフのことを知ろうと心がけた。

「野球を通じてすばらしい人たちに出会えた」と振り返る池田さんの就職先は、某プロ野球球団の職員。社会に出てからも野球漬けの毎日が続く。

（上田）